

Finland <フィンランド>

HENNA VIRKKUNEN、教育相：フィンランドで最も重要な政治課題の一つは、すべての児童、すべての国民に平等な機会と教育を与えられる制度を実現したいということだと私は思います。どこに住んでいるか、裕福であるか貧しいか、女の子か男の子か、は関係ありません。誰もが等しい機会を与えられることを目指しているのです。

TITLE: Strong Performers and Successful Reformers in Education: Finland

TIMO LANKINEN、長官（国家教育委員会）：フィンランドでは 1970 年代に基礎教育を一から立て直しました。それは非常に中央集権的な改革でした。しかし 1980 年代から地方自治体への分権に取りかかり、特に 1990 年代には意思決定権の多くを教育現場に移しました。もちろん学校や先生にも多くを委ねました。それは言うまでもなく、高度な訓練を受けた教師がいるおかげであり、実際に非常に多くの仕事を任せています。

テキストスライド：PISA2000 年調査から 2009 年調査まで、すべての参加国の中でフィンランドの成績は一貫してトップクラスであった。

教師：これから先生がアヒルとキツネの物語を読みます。ここに 2 羽のアヒルと一匹のキツネがいますね。さあ、よく聞いてください。集中して耳を傾けるのです。

HENNA VIRKKUNEN、教育相：フィンランドの教育システムでは、基礎教育の地方分権が非常に進んでいます。地方自治体が学校を運営し、学校に対する責任を負います。もちろん、基礎教育に関する法律も制定されており、それは国レベルです。さらに、国が策定したコア・カリキュラムもあります。しかし、学校や自治体には大きな裁量が認められているのです。

テキストスライド：フィンランドが 1990 年代に進めた教育の地方分権には、優秀かつ高度な訓練を受けた教師集団が必要だった。

教師：ナオミ・クライン著の『No Logo』を読んだ人は？（邦題『ブランドなんかいない』）

生徒：スウェーデン語で話すのは少し難しいのですが。

教師：大丈夫ですよ。説明してみてください。

生徒：ここで言いたいのは、人々は製品そのものより、ブランドや商標を好むということです。より重要なのは、ロゴです。

PASI SAHLBERG、所長（CIMO＝フィンランド教育省の管轄する国際交流推進センター）：教職はフィンランドでは常に人気のある職業です。そして他の多くの国々でも、かつては教職が若者の間で非常に人気の高い職業だったと聞いています。私は、フィンランドでは、学校で勉強を教える仕事が若者をなぜ引きつけてやまないのかを考えることが大事だと思います。私の考えでは、わが国と他の多くの国々の学校との違いは、まず教職が常に知的な魅力に溢れた面白い仕事だという点です。言い換えると、わが国の教師は、教員養成課程で学んだ知識や技能を十分に発揮する場があると感じています。カリキュラムの計画や策定において一定の役割を果たし、生徒の成績査定でも非常に重要な役割を担っているのです。

TIMO LANKINEN、長官：教師という職業はフィンランドでは非常に高く評価されます。しかし若者の間でも魅力を維持してきたのは、興味深いことです。実際、フィンランドの若者にとっては、医師や弁護士に次いで憧れを寄せる職業の一つなのです。

HENNA VIRKKUNEN、教育相：高い学習成果を出している主な理由の一つは、充実した教員養成課程だと思います。すべての教師はフィンランドの大学で修士号を取得しています。また教職はフィンランド社会で非常に尊敬されるため、どこの大学も最も優秀な生徒を教師の卵として受け入れることができます。ですから言うまでもなく、非常に意欲が高く、非常に優秀な生徒が教師を志望することになります。

教師：さて、このクラブに昨年は41人が所属し、今年はそれより7人少ないとすると、今はクラブに何人いるのでしょうか？

生徒：これでいいですか？

教師：41 マイナス 7 ですね？ はい、その通りです。

OLLI LUUKKAINEN、委員長（フィンランド教員組合）：わが国の考え方は、すべての教師が大学で専門教育を受けるべきだということです。教師は全員、修士号を持っています。これは非常に重要です。そうすれば、理論と実践を非常にうまく連携させられると私たちは考えます。またわが国の特色は、教員養成課程の学生が、大学で理論として学んだことを実際に練習できる教員研修学校があることです。

JANNIKA SARIMO、(トゥルク普通学校・英語教師)：教育実習生は、大学で自らの専門教科を数年かけて学んでから、教員研修プログラムに進みます。専門教科の教員研修は1年間続きます。最初は理論から始めますので、大学でまず何週間か勉強します。続くオリエンテーション期間に、我々の学校にやってきます。指導役の教師(メンター)に会い、担当するクラスルームを訪ねます。そして一定の期間、彼らはペアを組んで授業を行います。その後、大学に戻ってさらに理論を学びます。いくらか経験も積んだので、実践的な見地から以前と異なる質問もできるでしょう。寄せては引く波のように、学校で実践的な経験を積んでは、また大学に戻って理論に基づく知識を吸収するのです。

教師：みなさんこの詩を読んできましたか？ さあ、もう一度この詩を読みましょう。読みながら、なぜこれが「詩」と言えるのか考えてみましょう。

ERNO LEHTINEN、教授(トゥルク大学)：調査や研究は、学校で実際に進める授業と融合されます。わが国は教育研究、教育心理学の研究、専門教育、教育政策などに多大な投資をしてきました。諸外国とこの分野の研究を比べても、私たちの投資は相当多いでしょう。つまり、教育政策、教育学習環境の開発、教材開発はじめ多くの分野で、活発に研究が行われているということです。調査・研究体制が確立しているため、世界中で起きている状況にもしっかり対応できるのです。

SUVI LEHTOMAKI、(トゥルク普通学校・教育実習生)：昨日、この問題を一緒に見ましたね。覚えていますか？ ボードに書いた数字を見てください。縦の列ごとに数字を足していきます。誰か助けてくれますか？ 黄色のボックスにはどんな数字を書きましょうか？

生徒：2

SUVI LEHTOMAKI、：2ですね。よくできました。ボードに書いてくれますか？

OLLI MAATTA、(後期中等学校・副校長、ヘルシンキ普通高校・スウェーデン語及び英語教師)：教師になることとは、実際の訓練で私たち学科教師がどのように仕事をしているかを理解することです。またクラスルーム実習では、彼らが教員養成を終え、最初の職場に赴任した後に、同様の問題に出会ったときいかに対処すればよいかという手段や情報を提供したいと思います。私たちは同僚教師と話し合っってメンター制度を考案しました。

SUVI LEHTOMAKI、：では、7はどのボックスの下に入るでしょう？ 1の書かれたボックスですね。正解です。ではその下に43と書きますね？

PASI SAHLBERG、所長：教員研修学校での実習や教員養成プログラムの一部がいかにか機能するかを知れば、私たちが「指導」や「監督」と呼ぶ役割の重要なことに気づくでしょう。通常の手順では、まず先輩教師と面会します。そして一通りの授業プランを示します。何をしたいかを説明する必要があります。それから生徒のクラスで実際に授業を行い、先輩の教師がこれを見守ります。後日、指導のための面談を行い、実習を経て気づいた別の考え方について話し合います。

指導教師（メンター）：以前、ボードをどう使えばよいか迷っていると話していましたね。それは技術的な問題です。一緒に検討してみましょう。でも私は、君がうまくやっていたと思います。君の言う通り、ボードから移動してコンピューターに戻ってこななければならない、やりにくいのは確かです。しかし技術的な細部の問題であり、今後は新たな機器も登場するでしょう。将来的には問題ありませんよ。

SUVI LEHTOMAKI、：このフィードバックの仕組みは本当に素晴らしく、豊富なフィードバックを受け取ることは非常に重要です。そうすることで、児童に与える学習課題の調節も可能になります。またメンターは、私が見逃しそうなポイントに注意を喚起してくれます。学習課題の難易度や、個々の児童がどのように取り組んでいるかにも目配りできるようになりました。

教師：7を3で割ると、答えは2と、余りが出ます。1ですね。

PASI SAHLBERG、所長：もう一つの特色は、わが国の学校では生徒が何か困難や問題を抱えているとき、その早期発見を非常に重視していることだと思います。これは他の多くの国々と異なる方針です。諸外国や他のシステムでは、問題の発生後に介入する手段があるでしょう。私の知る限り、他の国々では問題が持ち上がり、誰が見ても明らかに困っている場合にのみ、これらの手段を行使するようになっていきます。フィンランドではそのような考え方をしません。私たちは早期介入の大切さを信じ、教育プロセスの初期段階にこそ投資を惜しまないようにしています。問題の可能性がある生徒を早期に見つけ出し、できるだけ迅速に支援の手を差し伸べるよう心がけています。

テキストスライド：早期介入：フィンランドでは早期介入に重点が置かれている。特別支援（全日および短時間）を受けている生徒の割合は、1年生～3年生で最も高くなっている。（2010年、フィンランド統計より）

TIMO LANKINEN、長官：個別支援はフィンランドの学校や教育システムにおいてきわめて重要な役目を果たしています。私たちはあらゆる到達度の多くの児童や生徒に、学習の

つまずきに対する特別支援を実施します。

テキストスライド：前期中等教育の教師が授業に費やす時間：

OECD 平均、年間 703 時間

フィンランド平均、年間 592 時間

フィンランドの教師は授業以外の時間の多くを、特別に注意が必要な生徒のサポートに集中させている。(出典：OECD『図表でみる教育』2010年版)

HENNA VIRKKUNEN、教育相：児童の 30%近くは、通常の授業で何らかの特別支援を受けており、たいていは短時間の支援です。多くの場合、教師には助手がつき、授業を進める教師の補助をしたり、支援が必要な児童の手助けをしたりしています。

教師：それでは、今までに学習した全部の単語を読んでみましょう。

OLLI MAATTA、：よく行われるのは、特別教師が数時間単位でクラスに派遣され、対象の生徒を別室に呼んで学習の手助けをするというやり方です。それぞれの生徒に合った個別学習プランも立てています。こうした手段を講じることで、学習につまずく生徒がゼロになるよう保証するのです。

PASI SAHLBERG、所長：これに関してフィンランドで重要だと思われる点は、かなり高い比率の生徒が特別支援児童として認定されることです。15歳か16歳で基礎学校を卒業するフィンランドの生徒の大半は、通学期間のどこかで何らかの特別指導を受けています。つまり、特別指導は実際には少しも特別なものではなく、むしろ一度も特別指導を受けなかった児童や生徒のほうが特別なケースです。このようなやり方が、教育システムの公平さや質の高さにプラスの影響を生み、国際調査で判明したような結果をもたらすのです。

テキストスライド：特別指導：フィンランドでは学校教育を終えるまでに何らかの特別指導を受けた生徒が 40～45%に上ると推計される。(出典：サールベルク、2011年)

教師（生徒支援チーム）：彼女は比較的多人数のグループの中で集中することが難しく、比較的少人数であっても自分の作業に集中するのが難しいのです。

教師 2：彼女は過去にこのようなトラブルを抱えたことがありますか？

教師 3：今まではありません。だからこそ心配なのです。彼女は非常に才能が豊かです。たとえば英語のクラスでは、非常に熱心に勉強し、物語なども書いています。

OLLI MAATTA、:「生徒支援チーム」は週1回の会合を開き、多くの専門家がチームに参加しています。学科教師はこの場で様々なケースについて報告します。いじめだったり、授業をさぼることだったり、学習障害や、行動上の問題だったりしますが、何でも取り上げます。学科教師は最初の報告者として、たとえば養護教員、精神科の校医、生徒カウンセラー、校長などにこうした問題を伝えます。それから、フィンランドのどこの学校でも開かれるこの毎週の会合において、個々の問題にケースバイケースで対処します。

教師4:彼女はどうも自分の容姿に悩んでいるようです。体格が大柄すぎると思っています。私は気にするほどではないと伝えました。それを理解してほしいと思いました。

MERJA LAINE、(ヘルシンキ普通高校、生徒カウンセラー):「支援チーム」は、学校で気づいたあらゆる種類の問題に対処しており、家庭内の問題や学習障害、多文化の問題が絡んでいることもあります。「支援チーム」が重きを置くのは、それにかかわる問題点にできるだけ早く介入することです。

TIMO LANKINEN、長官:PISA調査の成績上位者と下位者の間にはわずかな差しかありません。わが国の高学力を支えている理由の一つは、学習指導をめぐる好循環が起きていることです。それはすぐれた教員養成・研修プログラムと関係があります。他に考えられる理由は、生徒全員が高い水準を達成するよう常に力を注いできたことです。

HENNA VIRKKUNEN、教育相:フィンランドの教育システムの最大の美点の一つは、学校ごとの格差が非常に小さいことです。すべての学校で質の高い教育を受けられます。そして保護者は常に、自宅に一番近い学校が質の高い教育を行っている信頼することができます。言うまでもなく私たちの課題の一つは、将来的にこの質の高さを持続することです。国全体で質の高い教育と平等な機会を提供し続けられるよう、一日一日努力しなければなりません。